世界婦人

●本誌は日本に於ける婦人運動の先驅也

○本號目次

△男子に欺かる丶勿れ　安部磯雄（一）
△内村先生に上る書　鶴田英子（二）
△高尚なる藝妓　案山子郎（三）
△小說志士の末期　二葉亭主人（四）
△小說千潮　加藤眠柳（五）
△亂髮、くろかみ　小野有香（五）
△宿なし犬　木下尚江（六）
△徒然五の惡口　青々譯（六）
△高麗婦人　原夢想（七）
△快樂よこれな　洋々生（三）
△海内時事（二）
△海外時事（三）
△女詩人サッフォー傳（七）
△寫眞版（一）

男子に欺かる丶勿れ

安部磯雄

兩親や友人に配偶者を定めてもらうといふ舊慣は吾人の斷じて取らざる所である。よし兩親と友人の助言を借るとしても最後の判決は當局者の意志に依らねばならぬ。故に吾人は平素自由交際、自由戀愛を主唱して居る。然れども自由といふことも一たび其運用を誤れば啻に社會の風儀を亂るばかりでなく、一身の破滅を來すようなことにもなる。殊に婦人に於て甚しいのであるから充分の注意を要する次第である。噫自由よ自由よ、汝の名に依りて幾多の罪惡が行はるゝよと古人が叫びたる如く、幾多の薄情男子は自由戀愛の名の下に清淨無垢なる婦人を誑かしつゝあるか。吾人は素より婦人にして男子を飜弄するものの少からざることを聞いて居るけれども、誤れる自由戀愛の爲に最も多く打擊を蒙るもので婦人はあるから、吾人は婦人の方面より男子の薄情を攻擊し以て其注意を促したいのである。

自由戀愛には自由交際が必要である。而も其交際は少くとも一年以上のものでなくてはならぬ。生涯の伴侶を定むるに僅か一二ヶ月の時日を以てするのは實に輕卒も甚しいではないか。假りに住宅を構ふることがありとせんか。若しこれが生涯の住宅で而もこれを子孫にまで傳ふるといふことになれば、土地の撰擇、家屋の構造などにも愼重なる考慮を要するは明である。戀愛は勿論自由であるが、其撰擇は充分愼重でなくてはならぬ。一見直ちに相思の念を起すが如き浮薄も亦甚しきもので、斯る場合に於ける男女の戀情は少しも藝娼妓の其と異なる所はない。換言すれば一時的の相思に過ぎないのである。我國の婦人は未だ自由交際の途に慣れて居ないから、虛心平氣で男子と交はることが出來ない。若し男子に親切なる語をかけられ、同情を寄せらるゝが如きことあれば忽ち戀に落ちるといふ風である。彼等は恰も幼兒の如く餘りに人を信じ過ぎるので、容易に輕薄男子に欺かれるのである。一ヶ月や二ヶ月の交際で親切なる語や行を仕向けて來る所の男子は多く何等かの野心を藏して居るものであるから、斯る場合には殊に注意をせねばならぬ。人を見れば盜賊と思へとあるが如く、男子を見れば輕薄な奴じやと考へて警戒を加へて置く位が婦人の爲に安全なる途だと思ふ。よしこれ程までに至らずとも婦人は必ず心の奥に城壁を築き、此所には容易に男子を近かしめぬといふ見識がなくてはならぬ。

世には二重結婚をなす不埒な男子も往々あるが、二重戀愛を爲す男子は決して少くない樣だ。彼等は全く藝娼妓を弄ぶ樣な考で、清淨無垢なる婦人を弄ぶのである。今日の年若き婦人は未だ斯の如き事實の多く我社會の裏面に潛んで居るのを知らぬと見へる。婦人は決して遠慮する必要はないから、若し斯る事實があつたならば、これを知人の間に公にし、若くは社會に發表し、此輕薄男子をして再び世に立つとの出來ぬ樣にせねばならぬ。ペストや虎列剌は決して隱蔽すべきものではない。社會衛生の爲にはこれを公にして他の人が同じく此黴菌に罹らぬ樣警告を與ふべき必要がある。若し諸君の友人として交はれる男子に斯る醜行あらんか。たとひ其友誼を破つても差支ないから、堂々と其を攻擊するが善い。斯る屈辱は婦人自ら滅絶するの決心なくては到底出來ぬことだ。男子の中には痛快に二重戀愛などを攻擊し得る程の勇氣を有するものは少ないから、これは婦人自ら斷行するより外ない

女詩人サッフォー

男女交際の全く行はれざる社會に於ては必ず淺薄なる戀愛の行はるゝものである。男女は互に其品性や情操を知るの機會がないから、一見して知り得る所の容姿に依りて戀情を起す外はない。吾人は我國の古代に於ける戀愛が往々花見とか祭狩とかいふ機會に成立したのを見るのであるが、今日の所謂戀愛なるものは猶ほ此舊慣を脱し得ぬのではないか若し婦人にして幾たび夫を取換へても差支ないといふ輕薄なる考ならば知らぬこと、苟くも結婚を大切と思ふ人は決して一見戀情を起し、若くは親切なる言行ある男子を直ちに信ずるといふが如きことあつてはならぬ。男子も適當なる婦人を獲るには苦心慘憺せねばならぬ如く、婦人も亦容易に其戀情を傾注せぬといふ嗜がなくてはならぬ。

婦人には虛榮心が盛であるといふことであるが、或はそうかも知れぬ。男子から結婚の申込を受くることの多きを陰に誇つて居る所の婦人もあらう。男子から慕はるゝ場合には其諾否は別問題として婦人の心には必ず云ふべからざる喜悦と滿足の情があるに相違ない。これが實に婦人を過つ所の虛榮心である。勿論是は婦人の通有性、否男女の通有性であるに相違ないから、強いてこれを撲滅するにも及ぶまい。唯これを善い方に導けば足れりである。婦人が結婚の申込を受くる場合には、決して感情一偏に傾いてはならぬ。相手が自分を求めんとする動機が何處にあるか位は考へねばならぬ。若し人に優れるの容姿あらんか、男子はこれが爲に結婚を申込むのではあるまいか。婦人が容姿のみに依賴して男子の愛を惹かんとするのは金錢の力を以て善き婿を迎へんとする富豪の結婚政略よりも尚ほ淺間しい。資產は永久に保存するの望あれども、容色は十年若くは二十年以上持續することは出來ない。故に容姿のみに戀するが如き男子は忽ち亦他に心を移すもので、美人の薄命てうことは昔から相場が定まつて居る。されば婦人は容色の外に尚は男子を敬服せしむべきものを有して居らねばならぬ。容色も勿論貴きものには相違ないが、これのみでは左程價値のあるものでない。これに加ふるに品性とか敎育とかあれば其容色も一層光彩を放つ譯である。然るに一見して戀に落ちるが如き男子は全く容色のみを標準として居るのであるから、婦人たるものは斷然斯る男子を排斥せねばならぬ。若し男子にして眞面目であらば必ず婦人の性行にも注意すべき筈だ。而して其充分なる調査を遂げるには少くとも一年や二年を費さねばならぬ。男子でも婦人でも一二ケ月の間は假面を被つて居ることが出來るが、一年以上を經れば其眞相を暴露せずには居られない。故に眞面目なる男子は容易に婦人に結婚を申込む筈がないのである。若し數回の交際の後戀情を表白するが如き男子あらば彼は必ず輕薄にして信用し難き人物なることを考へねばならぬ

政府の壓制に對しては人民が奮起して之

（三面の一段に續く）

●本誌を讀まざるものは眞の婦人に非ず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

内村先生に上る書

福田英子

謹んで一書を内村先生の膝下に捧げ奉候。先生が道の爲め十年一日の如く、孜孜として、衆俗の蒙を啓かるゝ事は、われ人共に驚嘆敬服する所に御座候、殊に妾は妾が前途に一道の大光明を投げ與へられし大恩師、妾を懐疑の暗窖より救給はりし大徳と深く渇仰敬服するものに候。顧れば半世の事毎に違ひ所期は徒らに泡沫と消え果て、胸中には幾多の煩悶を抱き乍ら志尚存し、百方理想の實現に努力すれども日暮れて途遠く、蹉跎又顚躓、如何ともすべからざるの間にあつて、殘餘の躬に無限の氣力を與へ、無上の歡喜を宿らしめたるは偏に先生の指導感化に依れる者と深く感謝恐悦致居候。然るに頃者先生は、妾が社會主義を以て主義となし、左手聖經を執つて靈界の燭を擧げつゝ、右手を物界の濁流に投じ、萬衆の飢に叫ぶ者に滿足の微笑を浮べしめむと期するを、道に違ひ、教に悖れる者と爲し、妾及妾と歩を同うせるもの、爲めに道を説く事を辭し給ひぬ。妾等が絶望と疑惑とはそも如何ばかりなりしぞ。故に妾は身の不敏をも顧みず、聊か思ふ所を披攊して先生に問ひ奉り、併せて世の信者諸君に訴へんと思定め申候。先生の宣ふ所は基督教と社會主義とは柄鑿相容れざるもの、之を打して一丸となすが如きは獨り基督を誤り、教會を賊するものなれば其志を改めざる限は法を説くことなからむと仰せられ候。學淺く識狹き妾等にはよくは得解せざれども、此二者はさる懸隔千里なるものにはあらざるべしと被存候。何者基督教の主旨とする處は迷へるもの、傷けるもの悲めるもの、靈の救濟にこれあるべく、社會主義の目的とする邊は、迷へるもの傷けるもの悲める者の體の救濟にこれあるべく候、一は靈界一は物界、共に平等の享樂を萬衆に期するにあつて、毫も背馳する點なからむと存候。且つかの科學なるものは上帝の創造に成れる自然の徹を剖き、其眞を聞かんが爲めに生れたるものと承り及び居り候が、眞に科學の精神に觸れたるものは科學と雖尚神の攝理に依つて存するものなるを知り、靈界の息を吸ふて初めて玆に眞生命あるを確かに致候由。科學思想より胎胚して、物の眞髓即ち神意のある處を體し、之を實世間に施さんとするもの即、物界に於ける貧者弱者の鄰助者として現はれたる社會主義と雖亦神の攝理の一現象たる事は科學と齊しく云ひ得べき所と被存候、全知全能の神は宇宙なり、直ちに信に依つて其懐に擁かれむとする宗教と知に依つて枝葉を極め盡し、後に宇宙の本體に溯つて之が袖に縋らんとする科學とは共に神の影を求むる點に於て一なるべくば、科學に出でたる社會主義と雖別樣のものたりとは申難かるべく候。况んや救濟の靈物兩面はさる氷炭相容れざる關係のものにあらずして、現今の社會、神の御袖に縋らんとする社會の萬衆が不滿足を訴へつゝ、神の形造れる如き社會狀態に達せんことを要求せる現今の社會に在つて、之が要求を充し之が物界の救助の道を講するは神の眞意に叶へるもの、否寧ろ今の有樣にては物質上の救濟は、心靈のそれに先つべきものと被存候。且つや若し又假令妾等の事業を道に違へりと思し給はゞ、何故に違へる道にゆくの非なる所以を明かにして、之を邪道より救ひ給ふことを吝まれ候哉。之を排し給ふ先生の明慮に就て聊か疑なき能はざるより、物知らぬ身の分をも顧みず、ひとり妾ひとりの身ならず、同じ道踏む人人にも代りて、敢て一書を上る次第に候。其愚を憫み、悖恩の罪は偏に御容赦被下度候。頓首。

海内時事

○請願運動の有望

吾等の治安警察法改正に關する請願は去月二十七日衆議員請願委員分科會の可決採擇する處となり候處、本年より請願委員の權限擴張せられ、請願中重要なるものを可決いたし候時は直ちに議案として之を本會議に提出すべき事と相成候より、我等の請願も、福井三郎、古賀庸三丹後直平三氏の起草委員に依りて、左の如き議案となり、近日請願委員總會の討議に附せられ、其上にて院の本會議に附せらるべく候。

治安警察法中改正法律案

治安警察法中左の通り改正す

第五條中第五項を削り第七項中『女子及』の三字を削り、『發起人たることを得す』の下に『女子の發起人たること亦同じ』を加ふ。

理　由

今や時世の進運に伴ひ女子が政談集會に參同するを禁ずるの必要を認めず、是れ本案を提出する所以也。

未だ結社に加入することを許さず、又政談集會の發起人たることを許さゞるは、吾等の請願の大部分を拒否したるものと申すべく候へ共、兎も角吾等が毎に不便を感じつゝありし、政談集會に出席するの自由を得候は、物足らぬながらも慰むる節は有之候。何となく張合の拔け候感は有之候へ共、本會議に附せらるゝの日、大擧して押寄せ候は亦一快事と存候。

○同志婦人親睦會

三月三日は都も鄙も雛祭とて、年若き御婦人達も、めでた白酒の醉に眞白きまぶたホンノリと、うすくれなゐに染めたまふ日に候。玆にわれ等同志の婦人は、彼の虚飾的な、階級的な御雛壇に、いささかなる樂しみを享けんよりはと、此日午前十時頃より戸山原に於て第二回の親睦會を催すべく、道順とて先づ堺爲子姉方に集合致候。折柄の冷風を冒して會せられたるもの、婦人には西川姉、幸徳姉竹久姉、前田姉、神川姉等十數名、男子には渡邊兄、安成兄、小野兄、吉田兄等また十數名。殊に野澤兄は蓄音器を携へて來られ候。先づ堺姉の優しき御挨拶あり、次に西川姉の烈しき氣焔ありて後うち揃ひて戸山の原へまゐり、空高う翩へる赤旗の下に、各々携へ行き候行厨を開き、且つ食ひ、且つ笑ひ、或は鬼ごッこに、或は駈くらに、充分の歡を盡し、疲れし足を引ずりて、各々家路につかれ候は日の將に傾かんとする頃に候ひき。あわ樂しかりし一日よ。吾等は此會が單に鬼ごッこの會たるに止まらずして、尚一層の意味あるものたらしめん事を期せざるべからず候。

○狂せざるを得ず

芝のさる家にわびしき一人住の美人あり、たちゐ振舞世の常ならず、兎角物狂はしき風情なるに、近隣の人々の疑ひを招ぎ居り候處、萬朝報記者の報ずる處によれば、これなん世にときめきたまふ原内相のまことの妻に候由。なになればをかしかるべき世を怒りてかゝる物狂ひをばなし給ふらんと尋ね候に、原氏はなべての男の子のためしにもれず、既に愛せる妻あるにも拘はらず、秋田あたりの婆藝妓に現を拔し、遂に本邸に引き入れて偏愛其醜を極め候ひしかば、心弱き夫人は遂に逆上いたせしにて候。世上かかるためし尠からず。げに弱きは女に候憎さは男に候。吾等は呪ひの釘に醜き男の頭を打ち碎き、力をこめし七首の切先に汚れたる男の胸を刳らざるべからず候。あゝ吾等は心づよからざるべからす。さるにても得たきは經濟上の自由に候はずや。

○六十二年の奴隷生活

世にもあはれなるは宮仕が身の上に候。玆に、仙波さい子とて目下貴族院議長徳川公爵家の女中取締役を勤むる人あり。十歳の幼き時鹿兒島藩主島津齊彬に仕へ、其女敬子の御附となりしより、當年七十二歳に至るまで、敬子が家定將軍に入輿せし時も之に從ひ、敬子死して後も猶は同家の女中取締として、絶えず忠勤を勵み居り候由。殊に唯一の嗜好たる喫煙も、主人が好まざるの故を以て之を禁抑し、家法女中の觀劇を禁ずるを以て、生來一度も芝居を觀し事なく、只樂みとするは、絶ず敬子が墓に詣で候事のみ。嚴かなる主君の犧牲に青春の熱情を殺し冷たき榮華の影に温かき涙を涸して、六十二年が月日を暗に暮し候、自覺なき老女が身の上、思へば留めあへぬ涙催に候。あゝあはれむべき老女よ。なべての人の惱多き、てふ春の夜な夜な、老女が夢は果して何處に通ひ候らん、梅の盛りの今日も亦、杖を力に姫が墓にぞ詣で給ひけん。げにもあはれは宮仕が末路に候。

○久田二葉兄逝く

趣味ある閑談を以て毎に本誌を助け給ひし久田二葉兄は、去月二十七日午前八時、心臟病を以て、かへらぬ旅に出立たれ候。兄齢未だ二十四、性學に篤く、殊に博物學に深き趣味を有せられ、讀賣新聞、家庭雜誌等に筆を執り、將來實に有望の人なりしに、誠に惜むべき事に候。尚兄は熱心なる社會主義者にして、其爲に職を褫はれし事も有之候。吾等は深く兄の夭死を悼と共に、後に殘り給ひし夫人と幼兒とに對し、滿腔の同情を表し候。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を矯めねばならぬ如く、資本家の暴慾に對しては勞働者が同盟罷工を以て報ひねばならぬ如く、男子の放縦に對しては婦人の反抗に待つより外はない。不品行なる夫を棄つる勇氣なき婦人は尚ほ幾分か恕すべき所もあるが、新に結婚せんとする婦人が其對手の不品行なることを知りながら彼に一生を托せんとするの心に至りては殆んど批評の語もない位だ。斯る婦人は全く結婚の爲に結婚するのであつて、吾人はこれを意氣地なき劣等女性と言ひたい。彼等は男子に翫弄せられ、終には秋の扇の如く抛げ棄てらるゝことを甘んずるのであらう。此の如き薄志弱行の婦人が存在する間は男子の放縦を矯正せんとは到底望むべからざることである

快樂よこれを（バーンス）

洋々生

快樂よこれを譬ふれば
薫ゆかしき罌子粟の花
君手折らむと觸れもせば
花は脆くも散果てむ。

譬へば川に降る雪の
その束の間は白くとも
水に落ちては永劫に
とけて流れて消え去らむ。

譬へば奇しき北光の
み空の際に煌めくも
君指さむ暇を無み
稲妻のごと飛び去らむ。

譬へば愛しく美しく
架け渡したる虹の橋
見るまほどなく一吹の
嵐の中に消果てむ。

高尚なる藝妓

案山子郎

▼『愛國婦人』といふ雜誌の記者は、男が浮氣するのは、畢竟、妻たるものゝ務が足りない爲であるから、婦人は遊藝を習つて置いて、高尚なる藝妓となり、そして夫の浮氣を止めよ、といふ意味の論文めいたものを書いて居られた。

▼まア何んといふ御名論であろう、婦人は須く高尚なる藝妓たれとは、何んたる囈語であろう、云はゞ夫婦の間に娼府を築いて、薄ッペラな愛嬌を夫婦の間の連鎖とするやうなものでないか。

▼夫が女郎買ひや、藝妓狂ひするのを妻の務めが足りないとは、呆れて物が云へないのである、併し翻つて思へば、此の一言は正に婦人に對する奴隷制度を表白したものである。

▼こんな愚なことを並べて、婦人界を啓發しようといふ、操觚者が世にあるかと思ふと、實に心細くなる、些と胸に手を當てゝ考へて見たら好からう。

▼奴隷となつて甘んじて居る、愛國婦人の口吻としては、何も怪しむに足らないが、これが世の婦人を誤らしむるかと思へば、涙が溢ぼれるのである、金にばかり目を眩まさないで、冷靜に說いて貰ひたい。

桐の木

しのぶ

嫁入の日の
箪笥つくらむ代にもと
移し植ゑにし桐の木よ
歳輪二十めぐれども
哀れ主なる乙女子の
今はこの世の人ならず。

海外時事

○杜伯危篤

客月の初手にしたる聖彼得堡よりの電報は、トルストイ伯の病勢漸く危篤なるを報ず。吾人はこの凶報に接し心中無限の悲あり。慰問の電報は櫛の齒を引くが如く、時々刻々、洋の東西より莫斯科府附近のヤスヤナ、ポリアナなる伯の邸に飛來せり。伯老いたりと雖齡未だ六十八歲に過ぎず、吾人は伯が速かに氣力を恢復し、露西亞國が現代專制の長夜の眠より醒め來り、將に輝くべき國民の自由、幸福の曙光が動き初むるを見る迄に生き延びられむ事を切に望んで措かざるなり。

○マンチエスターに於ける婦人問題大會

マンチエスター自由貿易會館に於て、一月の末の日曜に婦人解放問題の會議ありたり。ランカシャア及チエシャア州婦人職工選出委員、各地方の婦人商工會、及其他の婦人會之が發起者たり。

デチッケンソン夫人は席上に於て述べて曰ふ、婦人勞働者に密接なる關係を有する者のみが、渠等が如何に低額の賃銀を受け、いかに悽愴たる境遇に在つて勞働せるかを知悉す。一般の賃銀は一週間僅かに七志（一志は我五十錢位）にして、其内種々の減額あり。婦人が團體を組織する事は傭主の甚く嫌忌する所にして、此等婦人勞働者の地位を高めんが爲めには、婦人に政治上の權利を加へ、之を武器として奮るに非されば、全く絶望なり、と。

ボルトンなるレヂナッシュ孃は其能辯を以て會衆を感動せしめたり。曰はく、婦人勞働者が其賃銀を低減せられ、其協同貿易を禁ぜられ、且其工業上の地位が、政治上全く何等の權利を有せざるが故を以て侵害せらるゝの事實より、此集會は政府に迫りて、直ちに婦人解放の法案を提出せしむべきなり、と。

ゼー、ブルース、グラシヤア氏は、且つ過般ベルファスト協議會に關して動議に賛辭を與へたり。

ゴア、ブース孃及マルキーブチキース伯爵夫人（ゴア、ブース孃の姉）は露西亞及他の諸國に於ける婦人勞働者の狀態に關して極めて興味ある說話を爲して、決心を明かにし、エスサー、ローパー孃も婦人勞働者の賃銀問題に付いて更に一歩を進めたる決意を示し、ベルファストに於ける世界勞働組合の派遣委員の一人たるクーパー孃は婦人組合中の大團體に婦人投票權を與ふるといふ婦人選擧權法案を得たしとて、熱心なる演說をなせり。決議は滿場一致を以て贊成せられたり。

○實父の無情を訴ふ

二月二日、巴里よりの通信に曰はく、白耳義の公主ルキ、即離婚せられたるザクゼ、コーブルヒ、ゴタ國の皇子フキリップの妃は公開狀を以て本日のマチン紙上にて、父レオポルド王の苛刻なるを愁訴せり。父王は實の娘たるルイ公主を勘當し、剩へ故母皇后より負債の爲め拘引せらるゝを以て、之を償却せんとして姫に殘し置きたる遺産の讓與をすら拒絶したるなり。

二月六日の巴里通信には公主の身に付けたる所は一五、〇〇〇磅にして、是寶石の價なり、とありたり。

依て竊かに思ふ、かくの如き骨肉の爭鬪を釀すに至つては、王家の誇と雖野獸の群と何ぞ擇ばん、憐むべく惡むべし。

○墺地利の光景

墺地利社會黨の機關紙、アルバイター新聞は、道同普通選擧許可の法案が無事に議會を通過したりと狂喜せり。さもあるべし新議會に於て黨員は四十有余名。

○ヘレン、テイロア女史を哭す

吾人はヘレン、テイロア女史の遠逝を讀者諸君に報知せざるべからざるを悲む。

女史は實に彼の有名なるジョン、スチユワート、ミルの繼子にして、其頃の婦人運動の一方の重鎭として、又今日の社會主義運動の急先鋒として、普く世人の記憶せる所なり。女史は其同盟が社會的民主黨と成らざる以前の民主黨同盟の會員にして、又愛耳蘭土地組合及、以前の土地國有化運動に於て盛んに活動せし人たる事も、讀者の夙に知る所ならん。

千八百八十九年には倫敦市會に於て選擧せられて議員と爲りしも、後に至つて其婦人たるの故を以て、議員たるの資格は擯斥せられたり。女史は極めて流暢なる演說を爲し、心より愉快なる性質の人なりき、近頃に至りて、世界勞働組合に多大の同情を有し「スペシアル、エフォート、ファンド」に寄書したりき。女史が永眠せしはトルクウエー、過ぐる一月末火曜日にして、行年玆に七十五歲。

○鳩に反哺の信あり

飼鳩家ダブリュー、モリス氏の愛鳩はドウバーに於て失踪せしが、不思議なる事より再び飼主の手に舞戻り來る事と成りぬ。其次第を原ぬれば或る日モリス氏は、其飼鳩の内にて一羽の鳩は日每、煙筒の上に舞昇り、上より餌を煙筒中に拋與すが如き狀をなすを目擊せり。鳩がかくの如くする事三日、氏は訝りて人をして煙筒中を探り試みしめたるに、失ひしと思ひし鳩は煤煙の夥しきにも屈せず、煙筒の中に生きてありたりとぞ。反哺の信あるものとや言はん。奇特なる事かな。

▲吾等の勝利

治安警察法改正に關する吾等の請願は本十六日衆議院に於て拍手の中に可決せられました。詳細は次號に御報告します

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小說

志士の末期（ポリヤーノフ原作）

（本號より體裁を改めて結末と致します、餘り長くなりますから）

二葉亭主人

「あゝ、皆青年の客氣であつた、」と彼は獨言をいつて臥返りを打たうとすると、壊血病で腫起つた兩足が錐でゞも揉まれるやうにキリ〳〵と、その痛さは譬へやうもない。もう此病に罹つてからも日數が經つが、病勢は日増しに募るばかりで、此頃は兩足も紫色に浮腫れ、處々化膿して膿血が流れて、我足ながら我足のやうな心地がしない。口も上齶が糜爛て、齒の根は搖ぎ、脱けたのも最う四本に及ぶ。晝と晩との二度の食事には肉入の野菜の汁を二匙三匙吸ふのみで、麵包などは柔かな部分でさへ最う口へは入らぬ。强ひて入れゝば、齒に觸つて飛上る程に痛い。搗てゝ加へて、もう肺がいけぬ。咳嗽が間斷なく出て、赤黑い血を吐く。時とすると夥しく其を吐くので、覺悟した身にも流石に慄然とすることがある。

もう此分では永くは持たぬと、嘆息して部屋の内を顧視した。窓ガラスはドンヨリ曇つて、天井には蜘蛛の巣を張渡し、四方の壁はじめ〳〵と濕氣を帶びて莓苔さへ生えた處がある。床は無論木造りで、加之も其が泥だらけ。此體を觀ると何とも言へず心持が惡い。

此時入口の戸に開けた孔の蓋がコトリとゐざつた。これは外から内を覗く爲めの孔で、玻璃が嵌めてある。見ると、看守の憲兵の胡散さうな眼が其孔から覗いてゐる。やがて、磴と又蓋がおりて、跫と足音を偸みつゝ、憲兵は遠ざかり行く氣色。死ぬにまで監視が附くと思へば、覺えず怒氣が心頭に發する。

又覗かれるのが厭さに、痛みを怺えて臥返りを打ち、再び前の物思ひを續けた。あの時彼は平民を賴もしく思つたが、それは束の間の仇夢で、其後深く親しむで見ると、平民は存外まだ無智で、卑屈で、自分の地位を意識せぬ、よし意識はしても、敢然として其權利を主張する氣力に乏しい。苦い〳〵經驗を舐めて、失望して遊說から戻つて來たが、しかし元氣はまだ〳〵挫けなかつたから、矢張り成功を疑はずに、同志と倶に革命の氣運を鼓吹することを止めなかつた。其中にクーデターが始まつて、同志は續々逮捕せられる、處々の監獄は未決囚で一杯になる形ばかりの裁判があつて、宣告が濟むと、頭を剃こぼたれ、足械手枷を穿められて、ハリコフや西伯利の監獄へ死に行く者が道路に項背相望むばかり。其中で稍幸運と謂はれる際は、灰色の獄衣を被せられて、西伯利の卑濕の澤地へ流される人々で、尤も可傷なのは三年四年の永の年月を未決監の鐵窓の下に送る憂きに堪へかねて自殺する者、病死する者、或は發狂する者さへある。此悲慘の有樣を見るにつけ、聞くにつけ、彼の心中の愁苦は譬ふるに物がなかつた。もう絶對絶命の場合、非常の場合には非常の手段を要すると……あゝ、彼は遂に自ら擇んで死地に入つた。死地に入つたのが誤りか、誤りでないかは、蓋棺の後定まる事、兎も角も彼は其主義に殉する覺悟で、一身を投出して掛つたのであつたが……憶出すさへ無念なのは、其事破れて彼が汽車で莫斯科を落延る時の事であつた。同乘の旅客の中に、服裝の賤しい、怪しの人物が一人あつたが、彼の向ひに空席の有つたにも拘らず、態々隔絶れた處に席を占めて、此方が側視でもしてゐれば、目を聳てて凝と此方を視め、振反れば狼狽てあらぬ方を向いて、素知らぬ面をする。どうも胡散な奴であつた。やがてとある停車場で又一人胡散な奴が乘込むだ。互に知らぬ面をしてゐるけれど、どうも可怪いと感づいたので、坐睡の眞似をして窃に注意してゐると、果して二人は目交をして點頭き合つた。えゝ、失敗つたと思つたが、もう奈何することも出來ぬ。剩さへ其二人は二所に分れて左右の入口近く坐を占めてゐたから、孰れの口から出るにしても、其中一人の前を通らねばならぬ。失敗つた〳〵と腹の中で逆呼して窃と上衣の下に忍ばせてゐた拳銃を衣嚢から拔出し、之を外套の衣兜へ入れ易へたが、それでも尚は不安心なので、更に上衣の釦を外して、左の脇に垂げてゐた短刀を窃と前へ引出した。其中に汽車が目差す某市の停車場へ着く。車輛の中が一しきり混雜つく紛れに、彼も左手に僅かばかりの手荷物を提げ、右手は外套の衣兜へ入れて、確と拳銃の手を握つたまゝ、素知らぬ面をして降りやうとして、例の胡散な奴の前を通ると、其奴は目を擧げてヂロ〳〵と視たばかりで、其時は手出しをせず、引續いて降りて來る氣色であつたが、プラトフオームへ降りて見ると、其處ら一面に憲兵だらけ、加之も停車場の建物の入口には將校が二人立てゐる、一人は鐵道附らしく、今一人は町から出張したものらしい。彼は殆ど進退谷まつた。手荷物を拋棄てゝ、プラツトホームを飛下り、列車の下を潜り脱けて線路を超え、向ふに見える鐵道職員の役宅の處まで逃げ課せれば、もう占めたもの、大丈夫捕まる氣遣ひはない。けれども日が入つたばかりで、まだ四下は明るく、到底も逃げたとて逃げ課されさうもなし、且つ考へて見れば、近頃は同志中に往々探偵マニヤに罹る者がある。彼も或は其氣味で、實は何も怪しむべき事はないのかも知れぬ。えいと思切つて出口の方へ行かうとすると、衝と憲兵の一下士が行手に立塞がつて「命令に依つて逮捕します」といふが早いか、誰やら背後から確と兩腕を押さへた者がある。もう拳銃を取出すことが出來ぬ。已むを得ず衣兜の中で、銃口を前に向け、引金を引く、ドンといふ。あツと前の憲兵が腹を押へて、タヂ〳〵とよろけ、尻居にどうとなつて、吃驚した眼光で凝と面を視上げた。片手は地に突き、片手で傷口を押へた其指の股からタラ〳〵と血が流れる。同乘して來た胡散な奴は果して刑事で、其中の一人が是より先衝と人中を脱けて、前から躍り蒐らうとしたが、拳銃の音を聞くと、度を失つて偶と立竦む。其隙に又銃口をそれに向けて發火すると、此奴もワツと悲鳴を揚げて仰反つたが、續く一人の憲兵が隙さず後から之を抑へた。パラ〳〵と憲兵、巡査、刑事などがおツとり卷く。其時後から組付いてゐた刑事が、彼の左手を押へた手を放して、拳銃を奪ひ取らうとしたので、彼は其隙に辛うじて右手を衣兜から拔くことが出來た。此時の嬉しさは今に忘れぬ。さあ、占めた、いで、目に物見せて與れむと身構する刹那に、刑事の爲に拳銃の銃尻を抑へられて了つた。これはと思つて振挘らうとしたが、挘られん。えい面倒なと拳銃を放し、短刀の柄に手を掛けて、あはや拔放さうとする途端に、ガンと腦天を何か堅い物で打たれて、目から火が出たかと思つた。タラ〳〵としてよろける所を、又一擊、二擊どうと倒れて、其儘知覺を失つたが、後から思へば、これは刑事が奪ひ取つた拳銃で彼を擊倒したのであつた。

ふと氣が附いて目を開けて見ると、もう引括られて濕潤と冷つく地面に横はつてゐた。頭部の傷口から流れる血潮に、頭髮はベツトリ濡れてゐたが、不思議な事には少しも痛みを感せず、只頽然して身動きが出來ないばかりであつた。また目を閉ぢて凝然としてゐると、警部が側の憲兵の將校に向つて「如何でせう、死だのぢやないでせうか？」といふのが聞える。すると其將校が「大丈夫！絞罪になる迄は乾度生きとるです。こら！」と下士に向つて「此奴を馬車へ釣込め。」

あゝ、其後の事は多く言ふに忍びぬ。監獄の門を潜つて、背後に門扉の磴と閉る音を聞いた時には、何とも言へぬ心持がした、再び此門を潜るのは裁判所か又は絞首臺へ引出される時と觀念してゐたのが、思ひ掛けず死一等を減じて……へ、へ、僞善にも程がある。かうして生存へてゐるよりか、死んだ方が遙か勝しであるものを……。

入る日

しのぶ

黑髮を
なびかす風の
淋しきに
おばしま近くゐざりゐて
入る日の空を
のぞみつゝ
若き手弱女
思にしづむ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

干潮

加藤眠柳

（一）

庭に光る花の色よりも、一段と麗しかつた潮子の姿は、こゝへ嫁いでから全く變つて了つた。殊に良人が地方へ出張してからは、めつきり頬に痩が見ゆる。

茶室の右手に稀代の大松がある。松の彼方は小笹まじりの木槿垣、垣の外は村道になつてゐる。梅の徑を過ぎて松に近づいた潮子は、垣越しに外を覗やつた。垣外は急な坂になつてゐる。潮子は今坂を上つて來る姦しい聲に、ふつと耳を惹かれて物蔭に身を寄せた。そして窃と聲の主を透かした。

喘々いつて今坂を上つて來るのは、五十位の切下髪と二十近い兩人の式部。「ほんとうよ、あたし現に見たんですもの」とお出額の兩頬の赤染衛門は、切下髪の上つて來るのを待ち合はせて「だからねえ伯母さん、あたし潮子さんみたいに、未信者の人と結婚するのは可厭ですわ」と垣の間から庭を覗いたは。

切下髪は眉間に深い皺を寄せて頷いた。

「あたしも」と今一人の青瓢簟のやうな令嬢、しかも被布ばかり眼ざましい紫式部は、やうやくにして兩人に追つき「でも口島さんが然う言つてゝよ、潮子さんは財産に迷つて、光村さんとこへいらしつたんだつて」

物蔭の潮子は怨めしげに外を目戍つた。

「それでは何ですね？」と切下髪は兩人の式部と歩きだしながら「潮子さんは、もう神樣の事なんか、まるつきし忘れてゐらつしやるのね？」

「えゝ〜伯母さん、女の癖に、競馬へ行つて、賭事なんかなさるんですもの」と赤染は冷然一笑した。

「僥倖を希ふ者は禍なるかなだわ！」と紫も笑つて「墮落したものねえ！」と慷して且慨した。

やをら垣に近づいた潮子は唇を咬んで三人の行き過ぎる姿を透かし視た。その兩眼には血涙が溢れてゐる。間もなく三人の笑ひ聲が、手に取るやうに近く聞えたとき、潮子は化石のやうに身を悚ませた。

（二）

やがて潮子が茶室の方へ歩を移すと、隣ざかひの築垣の上から、十歳ばかりの肥つた丸い男の兒の顔が現れて「伯母さん光村の伯母さん！」と滿面に笑を含んで小手招く。

「あら、功さん！」と潮子も流石に誘はれて笑つて「功さん、もう濟んで、日曜學校？」と問寄つた。

「もう、とつくの昔」と功は莞爾して、「伯母さんは、ちつとも出ないのねえ、教會へ。何爲、えゝ伯母さん？」

「だつて、御用が有るんですもの」

「御用が有るつて、あすんでるぢや有りません乎。日曜日は御用しないで、遊ぶものだつて」

「何人が仰有つて？」

「母さまが、だから伯母さん、教會へいらつしやいよ、こんだの日曜から。ね、伯母さん？」

「えゝ、さうしませうよ」と答へた潮子の聲は曇つてゐた。

「伯母さん、ねえ、僕行つても可い？今」

「何處へ？」

「伯母さんとこへ？」

「えゝ〜、いらつしやいとも、遊びにいらつしやい」

「可い？嬉しい！」と功は築地の破れた犬の通ひ路に、四這になつて頭を出した。

「まあ、そんなとこから？」と潮子は眉を顰めて笑つた。

四這の頸を突出した功は、如何したのか沈と考へてゐる。

「功さん、如何なすつて？入つて來られないの？」と潮子は心配して問ふた。

「いゝえ」と功は頸を掉つた。

「ぢやあ如何なすつたの？」

「僕、廢すの、伯母さんとこへ行くのは」

「何爲？何爲？えゝ功さん」

「だつてもねえ、母樣が仰やつたの、光村の伯母さんは、もう信者ぢやないから、遊びに行つちや不可ないつて」

功は斯く言にくさうに重々しく言つて、ちやつと頸を引込めるや否や「さよなら、伯母さん！」と言すてゝ逃去つた。

（次號完結）

亂鼓

小野有香

識られて、蹴られて、遂に忘られて、老いんとすらん女よ、我れは。

彼の君に、あゝ革命の　意氣あらば、あつき息吹に醉はんとぞおもふ。

足尾の山、時ならなくに革命の火蔭、同志よぶみだれ黒髪。（臼井操子女史を懐ふ）

谷中の地、獅子吼千載名は消えじ、民をおもひて泣きます君はも。（田中正造翁を懐ふ）

意氣地なき民をすかしつ撫うちつ、眞晝盜追ふ　銀髯の翁（同）

盜來る、目醒めよ民と、帳あげて巨眼野に呼ぶ　不挫の義人よ。（同）

泣くはおろか、憤ろしき年頃の、民をしいたぐ政府をぞのろふ。

囚はれし、國事を議せる　男の子らの集會にらみて立てる女夜叉よ。

（政治運動婦人の議會傍聽）

なめげなり、國事を議すと、女措きて片手落ちなる法律作るよ。（同）

富士白う、碧空にかゝる朝な〜、讃美歌たかし角筈の森。

くろかみ

有香

戸山の原狹しとにあらず、いかり起つ覇氣のをみなの劍とり舞ふに。

躙ぢられし幾春秋のをみな子の、我れはと起てば風にこゑあり。

振り袖を吹く革命の風をはらみ、少女けなげよ群衆說く頬かな。

まぼろしか、あらず血を吐く人の生を夢とな過ぐしそ春多くもつ子。

辛からばよしや辛かれ、をみなとて、土下座して食ふ犬にしあらず。

玉敷の宮居の夢の醒めし今は、たゞ慚恨に身も世もあらず。

繼母よ我れは繼兒よ、何の宿世、誠心足らぬと責めますか君。

恥多き勤めを忍ぶこゝに三年、亡母の供養の料とし思へば。

辛くとも母とし仕へん女子ゆゑ、尊き父を恨むとにあらず。

父うらむすべも知らなく　幾とせを、辛き繼母御に仕へ來し我れは、

鋤執るを愚者とそしる色食き、智者よ學者よ知るやこの腕

○短文、短歌及新體詩を募集します

▲短文　清新の趣味ある短文を募ります。嬉しき事、悲しき事、腹の立つ事、何でも郵便端書に明瞭に記して投稿して下さい。

▲短歌　新派、別に何等の制限をも設けません、しかし、あまり貴族的臭味のあるものは取りません。

▲新體詩　調の如何を問ひません。但しあまり長いのは嫌です。艶なの、優しいの、凛としたの、雄々しいの殊に革新の氣を帶びたのを歡迎します。

毎號の原稿締切は、五日と二十日です、用紙は何でもよろしい、端書は殊に輕便でよかろうと思ひます。婦人諸姉の振つて御投稿あらんことを切望いたします。

社告

發行日を誤ること、豫告を空うする事は甚だ以て讀者諸君に對し申譯もない次第ですが、此度も亦止むを得ざる譯で此二つの御詫をせねばならぬ事に成つて誠に赤面の至りであります。打破つて申せば、何分にも狹い紙面の事ですから、編輯上の都合で、宛にした原稿が遲延したり、寄せられた原稿の長短の割合が狂つたりして、或は先に豫告して置いたものが後廻に成る事があり、折角一まとめにして掲載したいと思つた原稿を二に切つて出す事もあり、二つにして載すべきを一纏にすることもあつて玉稿を給はつた諸兄姉に對しては洵に罪多き業であります。これも一は編輯に拙き故ですから惡からず御笑給が願ひたいのであります。固より不體裁な所の多いのは妾達の方で泣きたい位ですけれど、そんな鹽梅でつひ何も角も不しだらと成つて了つたのであります。が、次號よりは少しく思ふ所もありますれば、面目を一新して有趣の記事を載せますから、益御愛讀を願ひます。恐れ入つて茲にお詫びを申上げます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

宿無し犬（山居雜觀）

木下尚江

二月の廿七日、天地も麗かであり、我れに少こし頭痛がするので、仕事を休んで散歩することにした、何處へ行かうかと考へたが、此程の或る寒い日に四五名の熱心な耶蘇教信者が、伊香保沼の下流虎ケ淵と云ふにて浸禮になつて洗禮を受けたことを聞いて居たので、何となく其の虎ケ淵を見たくなつた、

雪解けで路が惡るかろうとの注意を受けたので、今日は草履を止めて下駄にし、午餐後洋杖一本でブラリと宿を出掛けたのである、一丁許も行くと、何か頻に足に纏はるものがある、見ると又た例の黒犬「熊」である、「熊」は僕が初めて山に來た時からの友達である、最初の中は宿の犬かと思つて居たが然うでは無かつた、彼は無宿の犬である、然かし彼は伊香保の犬である、僕は至る所に於て彼を見る、僕の至る所彼は必ず從いて來る、何處で見付けるのか知らないが、何時の間にか飛び來つて、後になり前になりして驅けて行くのである、彼を見る者は小供でも大人でも皆な必ず「熊々」と呼びかける、彼はピンと卷き上げた尾を振り立てゝ愉快げに飛び歩りく、彼は全身眞黑だ、眞黑な毛がムク〳〵と全身を掩ふて居るのである、只だ見れば眞個の熊かと驚かれる、

何時であつたか日は忘れたが、何でも冬の寒い晩であつた、餘りに月が好く冴えて、寐るのも惜しいような氣がしたので、僕は夜更けて獨り沼元へ行つた、すると「熊」が何處からか直ぐに飛んで來た、僕は山下に低く湯澤の音を聽きながら木の根に腰掛けて月を眺めて居たが、僕と一間許離れて「熊」もチャンと坐つて居る、月と僕と「熊」と三個相見合つて思はず時を過ごしたが、兎に角「熊」は此の山に於ける僕の尤も親しき友達に相違無い、今日も彼は又た僕の前へ立つて虎ケ淵へと迎るのである、

好天氣、好眺望に、僕は道程には心も付かず、山の裾に沿ふて湯中郷村を過ぎ、更に寂しき狹き山道を幾曲りも上り下した、畑には老夫が青麥を蹈んで居り、山には若者が木の枝を拂つて居る、やがて水聲幽かに耳を打つて一個の木橋が前に現はれた、橋は十間にも足りない程のものであるが、其れを架したる兩岸の絶壁幾十丈、橋の欄干に手を支いて覗けば、遙か下なる暗き底を急流蛇の如く曲りくねつて落ち行くのが光つて見える、目も眩するばかり、此の橋より二丁ばかりの上流に河幅やゝ廣く木を横へて水を堰いだ所がある、其のドンヨリと綠色に水の堰へた眞中に於て、彼の信者達は千九百年の昔ヨルダンの水より上がりたる耶蘇の聖旨を偲びながらに洗禮の儀式を擧げたのであろう、若し洗禮だとするならば、彼の紅塵千丈の都會の會堂で、綸羽織やフロックコートの牧師が銀の鉢の水を指頭に掬んで額を濡らす形式よりも、斯かる人里遠き壯嚴なる幽境に於て身も心も赤裸々に洗い流す方が遙に雅事であると思つた、

橋を渡れば吾妻郡である、橋の袂に近き茅屋には赤兒を背負ふた妻君が良人が山稼ぎの足袋を繕ふて居た、僕は枯芝の土手に寐ころんで見廻はした、水澤山、二ッ岳、高根、烏帽子嶽など榛名の峯々は右手に聳へ迎りて、赤城の全山は直ぐ左手に其の雄大の姿を横えて居る、更に少しく頭を廻轉すれば、越後の雪山、春の日にキラ〳〵と光り輝いて居る、僕は何をも思はず何をも考えずに只だ其の急流の瀬音に耳を澄まして居た、

僕が寐て居るので「熊」は土のホケ立てる麥畑の中を荒ばれ廻はりて仕方が無い、僕は更に山路を流に逆ふて進んだ、そして遂に辨天瀧に到着した、堅氷宛ら花の如くに縁取りたる中を、瀧は水煙を日影に立てゝドウ〳〵と落ちて居る、

僕は稍々疲れを覺えた、

「熊」は切りに松の根方をせゝつて居る、見れば樵夫の殘したる人蔘を落葉の下から掘り出して食ふて居るのである、あゝ「熊」も意外の遠路に饑えたのであらう、然かし僕も實は頗る空腹を感じて來た、然かし僕の拾つて食ふべき物は何も見當らぬ、是非なく木陰の雪を含んで渇を愈やした「熊」は舌なめずりながら驅け來つて僕の顏に飛び付いた、

『今少しく忍耐せよ、歸りて汝と共に食はう』と話しながら雪解の泥を踏んで歸路に就いたが、僕の胸中には「飢餓」の問題が頻りに往來するのである、やがて人家のある所へ出た、其の軒下の日當り好き所に雞の餌を漁つて居るのを見ると我が「熊」はワンと一と聲飛び掛かつた、雞は驚いて羽音騷がしく舞ひ上がつた、

『こら、「熊」ッ』と呼ぶ僕の聲に、彼は雞を棄てゝ野路を猛然に驅けた、危難を逃れた雞は堆く積んだ薪の上に、コ、、、、と呼吸を鎭めて居た、

知らぬ間に時はイタくも經ちて、日は早や二つ嶽の右に斜きかけて居る、僕は地に長く我影を引いて伊香保の町へ入つた、「熊」は動もすれば埃溜などに驅け寄つては食を獵るのである、「最早宿が見えて居るでは無いか、早く行つて一所に食はう」と急がして坂道を上ぼつて來たが、僕の宿の門近き所に、誰が遺したのか、兎の肉の皮のまゝのが砂に塗れて居た、「熊」は直に口に啣へて先に立つて門を入つた、門内には多勢の小供が「メンコ」の遊戯をして居たが、彼の姿を見るや「熊々」と一齊に呼びかけた、去れど彼は見向きもせず、直に僕の室の椽先に進んで、かの兎の肉を味ひ始めた、僕は甚く汗になつたのでザッと一と風呂浴びて來たが、彼は尚ほ毛をムシリ棄てゝ切に肉を貪ぼつて居るのである、「人蔘と兎と何れぞや」と問ふて見たが、彼は一寸僕の顏を振り向いたまゝで、又た肉に取りかゝるのであつた、そして食い終るや、僕の與へたビスケットをば見返へりもせず、尾を振つて悠然と何處へか又た出掛けて行つた、

徒黨互の惡口

青々譯

ベルファストといふ所は特別な宗教團體を成して居て、愛蘭の北部は皆是だといつても可い。人口を略二分して半分が新教徒、半分が公教會といふ姿である。所で兩派は互ひに全力を盡して、一人でも多く信者を拵らへよう、一人でも餘計に歸依者を奪つてやらうといふので、それは〳〵苦心慘憺、中々一通の事でない。其熱心な行跡は日々人の聞く所であるが、殊に此一週間許以前の事、公教會の大團體が、此度新規に建立せられた本山に參詣に出掛けて、アルマーに集つて來た。で、彼の下等な新教徒の弱蟲共が、いざ歸らうとする道すがら、道を扼して、ズラリと並んで、手に手に石を擲付けるので、時ならぬ血の雨が此界隈に降つた、といふ噂を聞いた。併し是は全く公教會側の言立だらうから、實否の程は頗る怪しい。

各々一體此團體員と云ふが皆修道師なので、石瓦の類を袖中に潜ませて道を說く、正可の時の準備といふのであらう、顯正破邪の方便に於てはぬかりは無い。法律では此弊風を矯正せうと、術を換へ法を替へて、種々に試つて見たが、餘り甘くゆき相にもないといふ事である。條文に出て居る所は、漫に徒黨を作つて喧嘩口論を爲すべからず、若し犯したるものは科料廿五圓に處せらるべし、とある。一箇樣な風だから毎日警察署の報告簿には科料何の何某といふのが澤山出て居る。現に前週の如きは十二に成る小奴が大人並に二十五圓の罰金を出したといふ。此件は、往來で自分は新教徒だと奴鳴つて居つた所を見付かつたんださうだ。並通には、「地獄に行きやがれ羅馬法皇奴」だとか「地獄に行きやがれ新教徒奴」と奴鳴り上るのが定規である。

ベルファスト地方の一口噺に面白いのがある、それは徒黨の敵味方が惡口の吐き合ひをする爲に、紋切形のやうに科料二十五圓、——否應なしに出す事と觀念して居る。——因にいふが、貧乏人に取つてはよかれ惡しかれ、餘り得のゆく話ではないさ。惡口の地方の人は傳へ言ふ、橫町の暗に假臥つて泥醉者が「地獄に行きやがれ」と太平樂を並べながら、獨り悅に入つた所を巡査殿が見附る事がある。一體巡査の方では科料の餌で嗅はせて、告發者を釣る褒美として科料の半金は貰る——といふやうな術なので。此時、

「貴樣何ちゆたか」

「地獄に行きやがれ、と言ひました。」

「誰が地獄に行きやがれか。何が地獄に行きやがれか。」

「いやもうそれは貴下に言ふて貰ひたいグーブ。ウア、、馬鹿に高價くつきますからなア。」とさ。

生醉本性違へずとか、こんなに成つても財布の口を絞る事は忘れないと見える。

（マアク、ツエチンより）

初春

●○生

工場の笛に引かれたり春の水
美しき女むかしき電車哉
下駄音を聽ずましけり春の宵
春雨を物干竿に聽く夜哉
人世や意氣に感じて歌かるた
沐猴の冠整すや歌かるた
白眼や青眼や世は春の風

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

高麗婦人の古俗

在韓　原夢想

內房陰幽の處に窟居して男子と相對せず、出づるに轎子に乘り或は廣衣を纏ひ男子に路に逢ふ時は逃ぐるが如く路傍に避くるを、高麗婦人古來の風俗と思ふは大なる誤なり。往古は知らず、新羅の時代に在て、市場に賣買を掌るは婦人の職務にして、朝早く起き商品を頭上に戴きて市場に赴き、土上に箕坐して物品を販賣する事、我琉球列島伊豆七島及び南洋諸島、南方亞米利加の風俗に異ならざりき。高麗の中世までも婦人は男子と相對するを忌まざるのみならず、婦人の勤勞は男子に讓る所なく、活潑にして面白き生活をなしたるもの、如し、高麗の太祖王建は甲冑の裔に出で、將軍となつて貞州を過ぎたるとき、馬を柳樹の下に繋いで憩ふ、適少女の路傍に佇むを見たるが、其德容あるを愛し何人の女なるやと問ひしに、少女答へて曰く、妾は此邑なる長者の家女なり、暫く弊舍に憩ひ給へと、王建を引きて其家に宿せしめ、手厚く一軍を饗應し、寢に侍して夫婦の契を結べり、是れ則ち高麗初代の王妃神惠王后柳氏にてありき。高麗の大元に降るに及び元帝は貢獻として美女を徵し、元の駐在官の威權あるものは各々麗廷に迫りて美女を徵し、屯駐の蠻子軍も勅命を以て婦女を徵したるより、當時往々にして美人の强制徵收行はれ、縉紳豪族も其禍を免れず、(自ら婦を元の宮廷又は權家に求むる爲め、其女を遺物として元に送り、富貴を買得たる者あるに拘はらず)上下靡然として深く女性を隱匿し、他人をして之を知らしめざるに至れり、朝鮮と成るに及び、專ら明の風俗に法り、男女有別と云ふ倫理を楯として、今日の如く內房に牢居せしめたるものなり。結婚法も當時は今日とは全く反對にて、我國の古俗の如く、異母兄弟姉妹伯叔甥姪互に相婚嫁て、同姓相娶るは寧ろ通則として行はれたるもの、如し。然るに儒教主經は新羅の末世より之を攻擊して止まざりければ、高麗の二代王惠宗は其妹なる長公主を實弟照に妻はすに當り、物議を避けんが爲め、公主をして生母の姓に從ひ、皇甫氏と稱せしめたり、是に於て同姓相婚するには、女をして母の姓に從はしむるの新例を開き、同姓結婚は依然として行はれたり。肅宗王に至り功親の婚嫁を禁ずるの令を發し、後四十年毅宗王の時堂姑(叔母)從姉妹堂一姪女(從兄弟姉妹の女)兄孫女を娶るを禁じたるが、幾もなく蒙古の風俗輸入せられて、近親の婚嫁は支障なく行はれたり。此時に於て感ずべきは一夫一婦制(國王は例外とす)の實行せられつゝありし事なり。忠烈王元年、大府卿朴褕の上疏中に曰はく、我國男少なく女多し、而かも尊卑一妻に止まる、其子なきものも敢て妾を蓄へず、異國人來て妻を娶る定限なし、宜く呂僚をして庶妻を娶るを許し、品に隨て降殺し、庶人は一妻一妾を得せしむべし、と。然るに宰相中、妻の嫉妬を畏るゝ者ありて此議遂に行はれざりき。此の一夫一婦制は高尙なる理想に基きたるものにはあらずして、比較的結婚の自由なると、近親婚嫁の結果に過ぎざるが、此制に有力なる援助を與へたるは女權の案外に强大なる事にてありき。凡そ婚嫁は女家に於て行はれ、結婚の後も女は家居して其男を引き養ふ然れば財產の管理權は自から婦人の手に一任せられたるなり。而して財產管理權は家庭を制し、男子をして意を恣にするを得ざらしめたるものなり。去りながら此美風も蒙古の風俗と儒教主義の爲めに打破し盡され、今日の如く女性の墮落を來したるは是非なき事共なり、

婦人の服裝に至ては徵證すべきもの甚だ寡しと雖も、其知り得たるものを記せんに、高麗の婦人は食を節して衣を飾り、金銀珠玉を首飾となせり。彼等の最好む所は舞踏にして、暮夜には男女群集倡樂し、錦繡の裳を閃かして一鄕に誇り快となせり。新羅の時代は長襦を着け美髮を以て首に纏ひ、珠綵を以て之を飾れり。然れども大低跣足にして、粉黛を施すことなし。其後、金春秋の秀拔なる政策として、制度文物擧て唐制に法りたるが、文武王四年に至り、一般婦人にも唐制の衣裳を服せしめ、斯くて高麗の中葉、蒙古の風俗の輸入までは、其風俗を維持したるもの、如く。高宗の時、蒙古の大風塵沙を卷き來り、兵禍四十年、高麗の古俗を一掃して婦人の服裝も亦た蒙古の制に變じたり。是より百餘年、蒙古風は高麗半島を支配し、人心に固着して動かすべからざるものとなれり。故に高麗の末葉、恭愍王の時に當りて、男子の服制を舊に復し、此習朝鮮に及び、數回改正整理したるも、婦人の服裝は之を改むる能はず、以て今日に至りたるなり。我國に於ても十餘年前、洋化主義盛に行はれ、婦人の交際舞蹈を奬勵し、洋服に改めと企てたるも、婦人社會に固着したる習慣は容易に移すべくもあらず、一旦俗間の物議を惹起するに及び、忽ち復舊して其跡を留めざるに至りぬ。恭愍王の時代には婦人內房に牢居して、外界の空氣に觸れざりければ、百餘年の間固着したる習慣を、一朝にして捨つる能はざるは日本婦人の比にあらず、而して爾後、交際社會に必要なき婦人には之が衣服を改むるの必要もなかりしならんか。六百餘年を經たる今日まで、好古者流の材料として、蒙古婦人の好標本を半島に存留したるは、豈亦妙ならずや。

相送臨高臺　川原杳何極
日暮飛鳥還　行人去不息

サッフォーの傳

世界開けてよりの大女詩人なりと異口の齊しく唱ふる此有名なる女性は、紀元前六百十年、希臘レスボス島のチレミテに於て生れ、此地に住せりと傳へらる。此島はレスボスの社會の中心點と成つて、其地の大文學會からは首領と仰がれて居た。蓋し當時では男子と等しく婦人でも社會で活動して居て、毫も此と比べて遜る所はなかつた。

古くから彼はホメロスと並べ稱せられ、彼が詩人といふに對し女詩人の名を得て居た。或者は彼を第十の女神と呼做し、或者は優婉なる美花と讚へ、或は奇蹟と讚め、美の權化と愛で尊んで居た。是決して容貌の美なりしが爲ではなく寧ろ其詩才を賞揚したのである。彼は寧ろ身長低く色は黑い方であつた相だ。今殘つて居る詩は徇に零碎斷片に過ぎないが、之を見ても古人の言のあながちに過褒でない事が知れる。句々金玉、璧々明珠、感情双ら燄備はつて一點の難ずべき所のない、所謂完璧とは是である。彼が當時詩文界に於て一頭地を拔きて第一流の座に列したのも有理である。吾人の知る所では其調の最特色とする所は激越奔放の情緒に存する。彼は最も花を愛し、花に於ても殊に薔薇を愛して居つたらしい。

又古人の中には彼が特に諷刺の才を有して居つたと言ふものもあるが、矢張特徵は情の高調に存して居る。希臘の喜劇詩人は彼を娼婦として劇中に描出して居るが、後に至つては矢張純潔な女性であつたに相違ないといふ說が正しい事に成つた。スイダスといふ人の說に據れば、アンドロスのセルコラスといふ人に嫁いで一女クライスを擧げたと成つて居る。何者ドフロニアンの時代に一時彼はシシリー島に奔つて居たから、そんな風說も立つたものであらうが、後には故鄕に歸つてそこで死んだといふ事である。

今、古今の人が彼に對する評言を聞くとストラボーは婦人にして文藝上彼と比肩すべきものはそのかみに於て一人もなかつたといひ、希臘詩選の記する所は、當時、天授の詩才を有せる七人の婦人があつたが、其最も傑秀なるものは彼だとしてある。彼及び同鄕人なるアルケーウスがレスボス文學結社の創立者であつたらしい。アルケーウスは「菫を立つるものは」といふ起で有名な詩を書いた人で、サッホーの情人だといふ風說もあつた。後のピンダロス、アナクレオン、ホラース、カツールス等は彼が詩風を襲ふたといへば其の詩界に於ける勢力の並々ならぬ事も知れる。されば プラトーンの如きも彼を第十の女神と呼び、ソロモンすら甚く彼が詩を愛誦し、願くば之を暗誦し終つて死なば死たしと言つて居つたといふ事である。彼に就ての傳說はローマの詩人、オービットの作る所と傳へられ、獨乙ヴエルケルは「傳說に曲解せられたるサッフオの究」と題する著を公にして其虛實の辨を作して居る。近世の詩人中此天才を一番賞讚したものは、かのスヰンバーンで下のやうに言つて居る。「彼が斷片的な詩篇に徵するも詩作に於ける成功空前である、又作詩の術に於て絕後である」と。どうか日本からもか樣な大女詩人が出て一代の好尙を風靡し、今の文界の濁溷を淨化して貰いたい者だ。いな靜れく社會に慰藉を與へるやうな一大雄篇が出して貰いたいものだ。サッフォーの英譯はヘンリー、ワートン氏の編輯で一八八五、牛津デギツト、スコツト の發行が一番い丶、是は選抄で餘出せるものは悉く網羅してある。サッフォーの傳も附記してある。

○平和の福音　佐藤廣吉君著　定價四拾錢　郵稅六錢

○英文二十世紀新約全書　定價一圓三十五錢　郵稅拾錢

○英文單純生活（シンプルライフ）　定價五拾錢　郵稅四錢

○地理旅行談　青山學院教授　山田寅之助先生著　定價五拾錢　郵稅八錢

○兒童研究　ハリソン氏原著　松本春枝君譯　上製七十錢　並製五十錢　郵稅八錢

○天國と搖籃　大谷牒君譯　定價三十錢　郵稅四錢

○人の運命　神學士　田中達君譯　定價二十錢　郵稅四錢

○日々の力　根本正君譯　五十錢　三十五錢　郵稅六錢

○女子立身傳　根本正君譯　定價四十錢　郵稅八錢

○はなしの園　古谷新太郎君譯　定價二十五錢　郵稅六錢

目錄出來御入用の方は二錢切手を添御申込あれ

東京市京橋區銀座四丁目壹番地　內外書肆　教文館　(電新二五二六)

ユニヴァサリスト

第三號(二月三日發刊)要目

思想界革命の健兒　(每月壹回壹年分四拾錢)

▲神の化身……赤司繁太郎
▲勸話……齊木仙醉
▲古代今代の奇蹟……ケート博士
▲悟道……西島祐介
▲神觀の進化……西岡正親
▲理想と青年……安部磯雄
▲ガリラヤ湖畔の旅……茅博士
▲洗禮のヨハネ……欽理
▲神の顯現……可路須
▲ユニヴアサリズム……赤司生
▲靜思默想錄……一牧師
▲新體詩短篇……人見東明

發行所　東京小石川小日向臺町二丁目廿六番　世光社

進步派基督教の機關

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

柳川春葉氏著

後の世

事業に破れ、戀に破れ、幾年の苦勞と前途の望を空うして、茫然浮世の巷に立つ者あり。彼は今何をか語らんとする。過去を說かんは餘りに辛く、未來を告げんは餘りに漠然たり。　彼は只默して「後の世」に入らんとす。　しかして其「後の世」とは何ぞ。或者は名利を思捨て、世外に超越せんとし、或者は自暴自棄の身を更に暗黑なる世界に墮落せしめんとす。事業に破れ、戀に破れし者は來りて彼が「後の世」を見よ。業成り戀に幸なる人は來りて彼が運命を吊へ。

前編出來
梶田半古氏畫
實價六拾錢
郵税金八錢

發兌　東京日本橋通四　振替口座一六一七　春陽堂

今の世に東京パックを見ざるものは當に時勢後れなり

一部定價金十三錢（毎月二回）
東京市丸の内　有樂社　有樂町

時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を増し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の御肌には殊に効驗著し
定價　大瓶廿五錢　瓶入十二錢　袋入五錢　小袋二錢

本舗　ライオン齒磨發賣元
東京神田柳原河岸　小林富次郎

東京神田東紺屋町
安藤商店
電話本局四八四番

伊豆三島　花島煉乳場製
名譽ある
金鶏ミルク

發賣元　東京市日本橋區大傳馬町　逸見山陽堂
（電話浪花二一五番　振替貯金口座三三九六番）

大同生命保險株式會社

本社　大阪市東區大川町四十七（長電東二〇九五　同三四六二）
社長　廣岡久右衛門
支店　東京市京橋區南紺屋町一二（新橋長電五一八）
支店　京都市柳馬場三條上る（長電五三六）
出張所　名古屋　廣島　小樽　仙臺　高崎　福島　金澤　長岡　福岡　岡山
代理店　全國各地

●齒科治療　自午前八時至午後六時●
神田區須田町廿六番地
齒科醫　吉瀨才一郎
勞働者諸君に限り藥價診察料共に御隨意
晝間執業者の便利上夜間十時迄治療仕候

各國語聖書、基督教書類
其他一切新刊書類確實販賣
東京神田區猿樂町二十五番地
振替貯金口座六三三〇番
中庸堂書店

珍書
三筋の綠
岡鬼太郎新著
價五拾錢　税六錢
東京京橋　發兌　隆文館

見よ陽春の盛裝を凝して出たる婦人世界

婦人世界

三月一日發行　第三號　一部十五錢　郵税一錢　六部八十五錢　郵税六錢　一年分一圓九十錢　郵税共

口繪●彩色石版畫三枚悉美麗●名家の令孃寫眞●新婚寫眞●東京勸業博覽會全景●和服の獨逸婦人
▲第二回大懸賞珍附錄當選發見　方法發表
●私の肺病全治實驗（野村敏子）◎女中奉公より成業せる女學生◎雛祭と雛道具保存秘法◎電話交換手の實歷談…◎子供部屋の造り方と設備
◎小兒感冒の手當　加藤博士　◎少女欄　弦齋氏執筆　益好評
娘時代の生活法　村井弦齋
△心の修養は如何にするか△我儘の癖は如何に矯むるか
△虛言の癖は如何に矯むるか△依賴心は如何に矯むるか
△多辯の癖は如何に矯むるか△嫉妬心は如何に矯むるか
◎自由結婚の實行者　鳥居女史　面影　◎弦齋夫人　三月料理
◎インフルエンザと鼻の注意…（くわひ△蜂藥飯△ムッ）
◎米國大統領候補者　ブライアン氏夫人（下を瞻ふ）　山下米國文學博士　（書生の親）

東京京橋南紺屋町十二　實業日本社　賣捌　各地書店

◎定價　△一部四錢五厘、十部四十二錢、二十部八十錢
△申込は總て前金の事。△郵税當方持
編輯人　石川三四郎　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七六二番地
印刷人　神崎順一　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七六二番地
發行所　世界婦人社　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地
東京市京橋區築地二丁目廿一番地